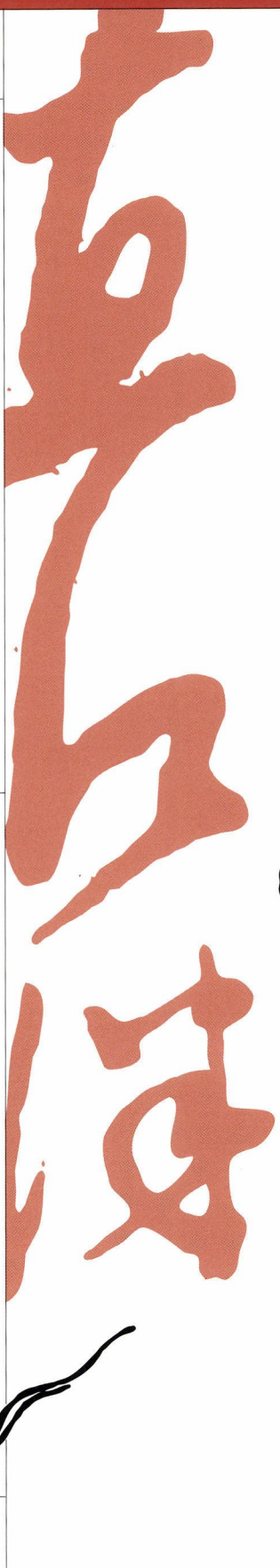
季刊

直江の津



◉直江津経済文化研究会◉

秋号

2003

9,10,11月

◉特集◉

「鉄道唱歌」の旅人



巻頭エッセイ●わたしの直江津

夕陽と酒

知の楽しみ

海の総合的試験研究機関と共に歩んで

フリースペース

◉◉越後から大江山へ行った◉◉ 酒呑童子と茨木童子

江戸開府四百年記念

ミニ特集

江戸城攻略 弐万弐千歩のたび

発刊のことば

直江津は、越後発祥の地という歴史を振り返るまでもなく、日本各地から山海の物産が集まり、四方に送り出す商いの場でした。そこに行き交う人びとが織りなす人間模様は、地域に文化を育て、数々の物語も生んできました。

これは、経済の拠って立つ場が文化を育む地でもあり、それらは別個のものではなく、根を同じくする一本の樹であることを実感させてくれるものです。

本誌は、経済であれ文化であれ、今からその種を播き、苗を育てようとする人たちのために、直江津を掘り起こし、耕しておこうというものです。そして、後々もう一度地域を見直そうというとき、その原点になるような深く地域に根ざしたものでありたいと考えています。

本誌に敢えて限定された地域名を付したのは、それが排他的なものでないことは言うまでもありませんが、社会が指標を失って混迷する今日、自らが立つ、足元の「地べた」を検証し直すことによってのみ、経済、文化、環境などあらゆるものへの問題提起、提言、行動が可能になると考えたからです。

本誌が広く共感を得て、上越後（かみえちご）全体の地域振興に寄与できることを念願する次第です。

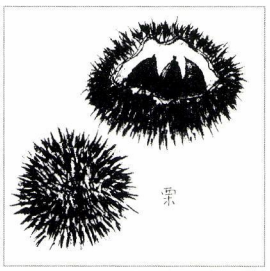
平成十三年三月

直江の津

第十一号　秋号
二〇〇三―九・十・十一

特　集　「鉄道唱歌」の旅人　4
巻頭エッセイ　夕陽と酒　田中孝司　3
知の楽しみ　海の総合的試験研究機関と共に歩んで　伊藤信夫　18
フリースペース　越後から大江山へ行った酒呑童子と茨木童子　三田村　優　14
ミニ特集　江戸城攻略弐万弐千歩のたび　吉越泰雄　9
シリーズ　屋台まち　24
読書びと　中島敦　父から子への南洋だより　川村　湊編　23
見る目　五智国分寺三重塔　28
東西海陸　27
バックナンバー　31

表紙筆文字は町名改正の願いの筆跡（明治十一年「福永家文書」）より。
「直江の津」とは中世の物語に登場する直江津のことである。



画・斉京十四春

夕陽と酒

田中孝司

子供の頃、高田育ちの私にとって、直江津は遠い隣町だった。小学生時代は行動範囲が狭いから、自宅のある大町から自転車に乗って半ば冒険気分で高田の街はずれにあたる東本町や北本町あたりまで来て、薄暗くなると心細くなり、夕陽を背に受けながら、懸命にペダルを踏んで家路を急いだ記憶がある。

まして、直江津となれば、汽車に乗らなければ行けない、という固定概念の上に成り立って近くて遠い存在だったのだ。

それが、昭和四六年、私が東京の大学に行っていた時に、突然、高田市と直江津市が合併して上越市となった。しかし、その後、何度か帰郷しても、私の故郷は高田であり、直江津は依然として隣町でしかなかった。

そんな私が、名実共に、上越市という存在を認めざるを得なくなったのは、縁あって、現在の職場にお世話になってからである。入所後まもない昭和五四、五年の頃、直江津駅前通りの北支所勤務となり、当時、商工会議所の専務理事であったSさんに直江津の街中を案内してもらったのである。

周知の通り、直江津地区の町名は、現行の町名とは別に祇園祭のお饌米奉納でも知られるように旧町名が、今も多くの人に親しまれ、生活の中で息づいている。

高田育ちの私が早く直江津に溶け込むには、まず、そこから入らなければとの思いやりからだったのだろう。観光用のガイドブックに手書きで町名を落とし込んでくれ、それを片手に案内してくれた。駅前の曙町から出発して、名所旧跡の解説を受けながら、散策気分でゆったりとした時間が流れていった。海沿いの沖見町、天王町あたりに来た時は、もう夕闇が迫っており、そのまま山崎屋本店（旅館）内にある「漁火」という小料理屋に連れて行かれた。

その時のメンバーは、Sさんの親友で長く直江津祇園祭の事務局長を努められたKさん（故人）を始め、当時の私の上司であり先輩である方々であった。

その席で、私が最も感動したのは、まさに今、日本海に沈もうとする夕陽を見ながら酒を酌み交わす醍醐味であった。こればかりは、高田の仲町では絶対味わえない贅沢だった。

私が、初めて、直江津に嫉妬した時でもある。

（上越市在住）

特集

「鉄道唱歌」の旅人

「鉄道唱歌・第四集」北陸地方

1、車輪のひびき笛の声
　みかえる跡に消えて行く
　上野の森の朝月夜
　　田端は霧もまださむし

31、豊野と牟礼と柏原
　ゆけば田口は早越後
　軒まで雪の降りつむと
　　ききし高田はここなれや

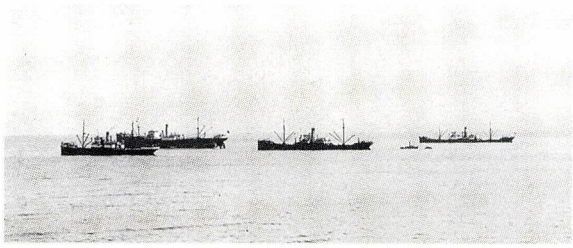
32、雪にしるしの竿たてて
　道おしえしへしも此のあたり
　吹雪の中にうめらるる
　　なやみはいかに冬の旅

33、港にぎはふ直江津に
　つきて見そむる海のかほ
　山のみなれし目には又
　　沖の白帆ぞ珍しき

34、春日新田　犀潟を
　すぐれば来る柿崎の
　しぶしぶ茶屋は親鸞の
　　一夜宿りし跡と聞く



昭和初年の雪の高田



出舟入船で賑わう直江津港（大正時代）

汽笛一声、明治五年（一八七二）九月一二日午前一〇時、天皇以下、政府の重臣たちを乗せた列車が新橋ステーションをすべりだした……。

鉄道の旅の始まりである。

明治一八年一一月には、早くも直江津―新井間の鉄道が開通。上野まで開通したのが明治二一年一二月（二六年までは、軽井沢―横川間は馬車連絡）、新橋―神戸間の東海道本線が全通する一年前のことである。

このようにして、徐々に日本全国へ汽車の旅ができるようになってきた、明治三三年五月「地理教育鐵道唱歌」第一集が出版された。「汽笛一声新橋を」で有名な鉄道唱歌である。作詞（著作権者）大和田建樹（おおわだたてき）・作曲多梅雅（おおのうめわか）・上真行（うえまつねつら）・発行者三木佐助（大阪市）・定価6銭。

二千万部を超えるベストセラーになり、第五集まで出版された。これに刺激されたのか、〝二匹目のどじょう〟を狙ったのか、全国各地、本線・支線、私鉄、軽便（頸城鉄道唱歌もある）に至るまで、ありとあらゆる「鉄道唱歌」が生まれることになった。昭和に至って、NHKラジオが「新鉄道唱歌」を作成して放送、相馬御風も二曲作詞している。

直江津駅を通過する「鉄道唱歌」は、分かっているだけで一〇曲もあるが、作者が見た当時の風景に、それぞれの視点があり大変興味深い。

特集で紹介する二曲は、オリジナルの「鉄道唱歌　第四集」と「米沢・新潟鉄道唱歌」であるが、後者は大変な長旅である。

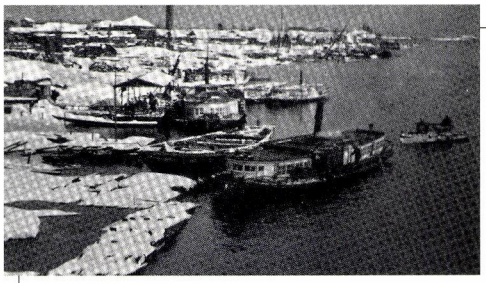


柿崎の浄善寺「しぶしぶ茶屋」

47、新潟港を船出して
　海上わずか十八里
　佐渡に名高き鉱山を
　　見てかへらんも益あらん
48、佐渡には真野の山ふかく
　　順徳院の御陵あり
　松ふく風は身にしみて
　　袂しぼらぬ人もなし

〈新潟・佐渡・直江津、直江津・伏木は海路〉

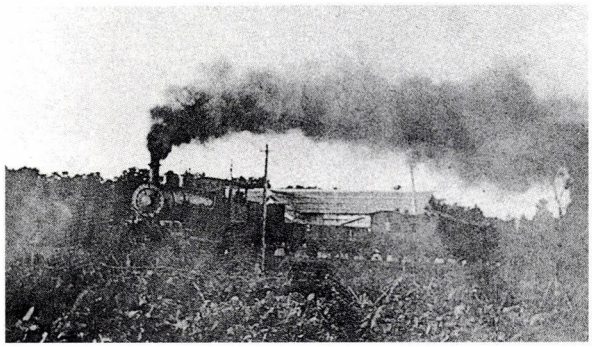
49、波路やすけく直江津に
　　かへりてきけば越中の
　伏木にかよう汽船あり
　いざのりかえへて渡海せん



昭和始めの冬の新潟港

〈北陸線〉

50、富山は越中繁華の地
　　ここよりおこる鉄道は
　加賀越前をつらぬきて
　　東海道にであふなり
71、駅夫の声におどろけば
　　眼はさめて米原に
　つきたる汽車の速やかさ
　　みかえる伊吹雲ふかし



開業まもない信越線

〈東海道線〉

72、おもへば汽車のできてより
　　狭くなりたる国の内
　いでし上野の道かへて
　　いざやかへらん新橋に

「鉄道唱歌」の旅人　略年表

明治一八年（一八八五）
　直江津・新井間開通
一九年　関山間開通
二一年　軽井沢間開通（軽井沢・横川間馬車連絡で上野間開通）
二二年　新橋・神戸間開通
二六年　碓氷トンネルがアプト式で全通
三〇年　北越鉄道　直江津（春日新田駅）鉢崎間開通
三二年　直江津駅現在地に現麓病院周辺から移転
　沼垂間開通
　荒川鉄橋開通により信越線・北越鉄道が結ばれる
　直江津・沼垂間開通
三四年　古川屋・いかや・山崎屋の三旅館が県内初の駅弁を発売
三八年　信越線経由で新潟・上野間開通
四四年　富直線（北陸線）直江津・名立間開通
大正　二年（一九一三）
　北陸線直江津・米原間開通
三年　頸城鉄道（軽便）新黒井・下保倉間開通

「米沢・新潟鉄道唱歌」

作詞　八木花岳
発行　明治35年3月訂正（訂正とは改訂版の意味だが、初版発行の年月は不明）・非売品

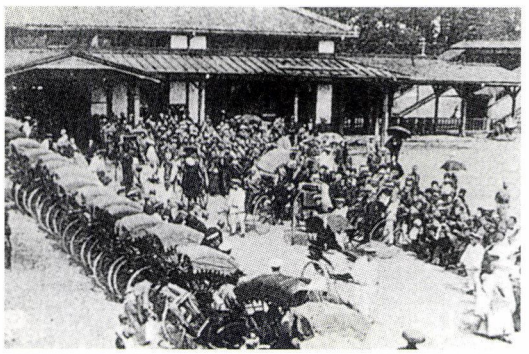
この歌は、度重なる乗換えと高崎で一泊という長旅である。新潟駅で降りて帰宅するまで、詞は九七番もあり、その内容は大変興味深いものがある。

◉奥羽線米沢駅発
1、汽笛一声米沢を
　はやわが汽車もはなれたり
　煙は空にたなびきて
　そよふく風はうら寒し

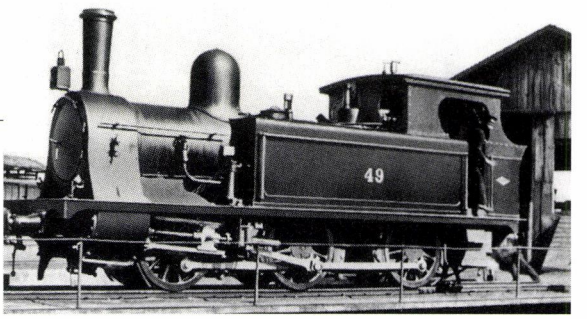
◉福島駅で東北線に乗換え
14、気もさはやかに福島に
　着きて列車を下りつつ
　昔をしのぶ文字摺の
　ふくさ手ふきを買い求め
15、きのふいでたる青森の
　夜行列車に迎へられ
　阿武隈川の鉄橋も
　またたくひまに打ち渡り

◉小山駅で両毛線に乗換え
32、小山に至り汽車を下り
　両毛線に乗りかへて
　栃木　富田　岩船を
　過ぎれば佐野のステーション
38、夏は冷しき伊香保の温泉
　秋はもみぢの榛名山
　見物せんと思ひなば
　ここより下りて馬車に乗れ
39、しばし休憩したるのち
　疲れたる身を励まして
　またも乗り換へ行く先は
　名も高崎のステーション
41、停車場を去る半町余
　道の右なる豊田屋の
　奥の二階に導かれ
　渋茶に咽喉を沽して
42、汽車の旅路の終日の
　疲れを風呂に流しやり
　夕げすませばはや結ぶ
　夢は何処に馳せ去りし
43、朝疾く起きて手荷物も
　はやくまとめて若者に
　送られながら乗る汽車は
　直江津行きの第一ばん

◉信越線へ
63、新井を左に見やりつつ
　雪に其名も高田駅
　すぎて間もなく聳ゆるは
　春日の山の城の跡
64、老松風にうそぶきて
　義理と勇とにすぐれつつ
　敵に塩をば恵みたる
　古将の心ぞ忍ばるる


人で賑わう高田駅前

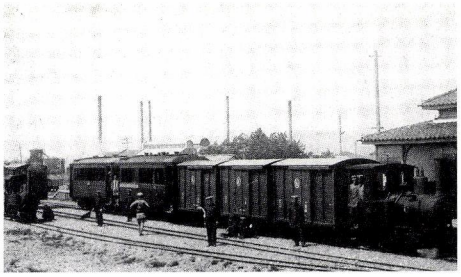

松風も涼しい春日山

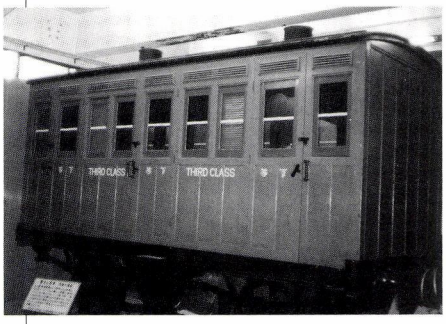

直江津・新井間を最初に走った機関車　1885年（明18）
イギリス・ダブス社製

65、直江津に着き汽車を下り
　北越線に乗りかへて
　さして行方はなつかしき
　親子兄弟友のそば

◉北越鉄道（現信越線新潟方面）に乗換え

66、道の左の畑の中
　西洋風の建物は
　これぞイントルナショナルの
　石油を製する処なる
67、外国人が我国に
　事業（わざ）をおこしし初にて
　壱千萬の大資本
　石油業者を驚かす

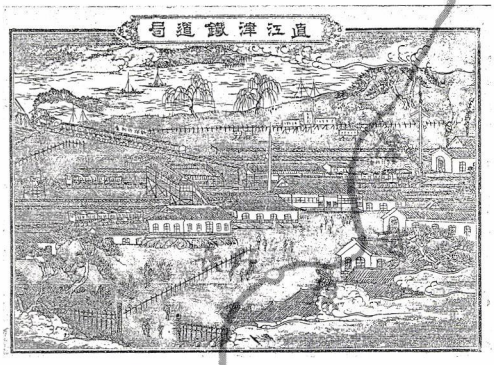

軽便の新黒井駅からインターの煙突群（写真の当時は日石）



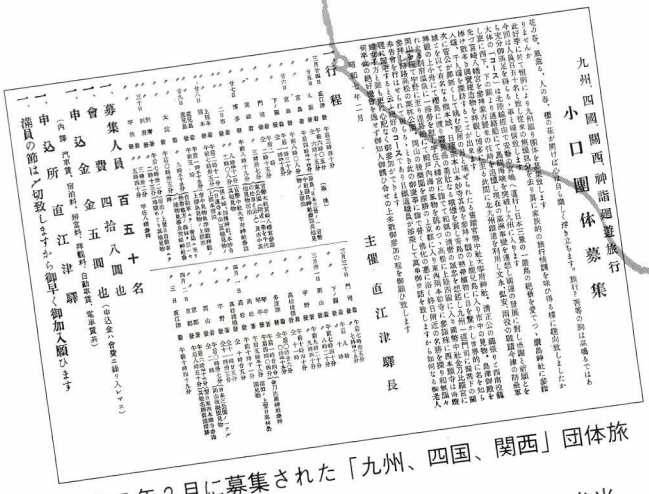
鉄道開業の頃の三等客車

68、春日新田あとにして
　犀潟　潟町東の間に
　柿崎駅をすぎぬれば
　　米山峠にさしかかる
69、線路は山を縫ひゆきて
　入ればトンネル出れば海
　妙なる岸は海岸の
　彼方此方に点在す

96、新潟市街の夜の景
　家毎にかがやく電燈の
　光は波にただよひて
　　いとも妙なるけはいなり
97、やがて大川前通り
　本宅さして馳せ行けば
　門に迎ふる幼児の
　　よろこぶ顔の愛らしき



現在地に移転した直後の直江津駅　荒川鉄橋も描かれている


九州四國關西神詣團體旅行
小口團體募集
主催 直江津驛長
昭和7年2月に募集された「九州、四国、関西」団体旅行の募集チラシ
11日間で48円（汽車・電車・自動車賃、宿泊、弁当、拝観料込み）。同年12月に行われた「九州、四国の旅」は65円、募集人数500名

駅弁事始め

駅弁が初めて売り出されたのは明治一八年、東北線宇都宮駅である。ニギリメシにタクアンを竹の皮で包んだものだったという。それから一六年後の明治三四年、古川屋・いかや・山崎屋の旅館仲間で、県内初の駅弁を売り出し、当時は三店が、一と月を一〇日交代で担当した。

直江津駅の駅弁は、ご飯とおかずが別々の折箱に入った二つ重ねで、おかずは、肉・かまぼこ・きんとん・つけ物など当時としては豪華なものだった。一コ五銭内外で、うな丼の約半値だった。弁当持参の乗客があたりまえの時代だったが、富山や佐渡から船で来て、翌朝の一番列車に乗込む人たちに喜ばれたらしい。（『新潟の明治百年』）

◆鉄道唱歌もいろいろあるよ

「地理教育鉄道唱歌」
発　行　上野・高崎・直江津・新潟間
発行所　正文堂（東京）・定価6銭
作詞　河村北溟　作曲　山田武城

1、上野の山に鳴り渉る
汽笛の声と諸共に
発車（いづ）れば何時か日暮（ひぐらし）の
里も離れて紅葉散る

37、田口に名を得て赤倉は
旅の疲れを癒すべく
関山越せば妙高の
高嶺は冬の最中なる

38、新井を立ちて荒川の
あらき流れもろ共に
北国無双の大雪と
音に高田の町に入る

39、此所は頸城の大都会
文化の普及いちじるく
空に聳へて棟高き
校舎の状（さま）ぞ見事なる

40、窓より望む春日山
月影最（い）とも清くして
雁の声さへさへわたり
俤今に変らねど

41、かはり行きしは直江津の
みなとの風景賑はしく
出船入船絶へ間なく
弥さかへゆく形況（ありさま）ぞ

42、北越線に乗りかへて
春日新田　犀潟や
潟町駅をあとにして
甘き柿崎駅に入る

43、鉢崎駅の東方に
米山薬師の霊地あり
此辺一帯難所にて
青海川へ行く汽車は

44、八つの隧道山をぬけ
また海岸に荒波を
破りて進む絶景は
筆にも畫にも尽くされず

＊同年に発表された「鉄道唱歌」は、判明しているだけで他に三曲ある。

「新鉄道唱歌」全10集
鉄道省・東京日日新聞・大坂毎日新聞主催
昭和4年　鉄道省編

第5集「高崎・信越・中央線」

1、丘の緑に葉がくれの
花さく美術東臺の
雲と梢を惜しみつつ
上野出で立つ旅ごころ

21、スキーに名ある赤倉は
湯の香噴き立つ雲の上
浴みの窓に日本海
見ゆる展望たぐいなし

22、関山すぎて二本木や
高田の街はこの下に
ありというてふ雪の市（まち）
町の名物スキー飴

23、かしこに見ゆる城の松
春日の山に日は落ちぬ
ここに起こりし謙信の
抱きし雄図誰か知る

24、続く松並すぎ去りて
見ゆるは直江津停車場
富山　金沢この地より
北陸線は岐れたり

25、佐渡の漁火眺めつつ
ゆけば石油の柏崎
長岡すぎて新潟市
夢路に通ふ浪の音

第6集「北陸・信越・羽越線」

1、琵琶湖を渡る朝風に
車窓の夢の今覚めて
此処米原を立ち出づる
北陸線の路はるか

24、姫川口の糸魚川
過ぐれば上杉謙信の
居城のあとぞ春日山
やがて直江津ステイション

25、雪の高田も程近く
上野を立ちて三越路に
旅する人も乗り換へと
いよいよ賑わふ汽車の窓

26、柿崎　鉢崎過ぎ行けば
線路に沿て植へ並（な）めし
防雪林の木の間より
ま近く見ゆる佐渡ヶ島

42、都へ上がる人皆も
青森さして行く人も
発車のベルの束の間を
惜しむは旅の習ひかな

国民歌謡「新鉄道唱歌」
日本放送協会（NHK）編
「信越線」
作詞　相馬御風　作曲　杉山長谷雄
放送　不明（昭和13年6月）

1、赤城　榛名の観望台
まゆに名高き高崎市
いづれはやがて目交（まなかい）に
奇峰妙義ぞ迫り立つ

5、田口　赤倉　関　燕
池の平とつらなりて
湯の香漂うスキー場
妙高山は天を衝く

6、高田はスキーの発祥地
国府の跡に仰ぎ見る
謙信城跡　春日山
港直江津　今栄ゆ

「新鉄道唱歌」「直江津―金沢」
昭和13年11月放送
作詞　相馬御風　作曲　杉山長谷雄
唄　松平晃・松原操・飯田ふさ江・今泉みどり

1、日本海の沖はるか
ほのかに浮かぶ佐渡が島
直江津いでて荒波の
岩打つ断崖　道険し

7、古九谷焼の美しさ
まぼろし胸にえがきつつ
北陸（ほくろく）一の文化都市
金沢市にぞはや着きぬ

参考：『歌でつづる鉄道百年』

ミニ特集
るぽるたーじゅ／江戸開府四百年記念

江戸城攻略 弐万弐千歩のたび

―榊原藩下屋敷跡から皇居まで―

文・写真　吉越泰雄
俳句　飯塚ふじ尾

六月、未だ梅雨入り宣言には間があるが、雨の気になる十一日、われら中高年江戸城攻略八人組は朝まだきの越後・高田を後にした。江戸の残る東京を散策、榊原藩の下屋敷から歩いて江戸城（皇居）に向けて進軍を開始しようというのである。時に、江戸城開府四百年、理由付けにはもってこいのウォークである。

メンバーの八人は、定年を迎える年齢の高校同期生三人を中心に、最高齢者で校長経験者I氏が男組、女組の四人はわが同期生の細君をリーダー格とした〝乙女会〟の面々。その名はちと首を傾げたくなるといったのは、一行の一人であるが、有意義に人生を過していることだけは確かなご夫人連である。

閑話休題――。

善光寺平を抜けて東京へ着いたのが八時五二分、参勤交代の時代は兎も角、三〇年前にも考えられないスピードだ。東京駅をうろちょろ、スーツ姿の勤労者諸君の中でリュックに帽子、ウォーキングシューズはラッシュ時に有閑もはなはだしく写る。

東京駅をさんざ歩いて、地下に潜り込んだ京葉線はそのまま地下駅の越中島へ着いた。ここの近く、歩いて一〇分位の所の古石場に旧高田藩下屋敷がある。下町の、緑を大切にし、花を咲かせるささやかな幸せを打ち水に託した庶民がひしめく一画に、古石場文化センターがある。そこをわれらは下屋敷跡と特定し、万歩計をゼロにした。

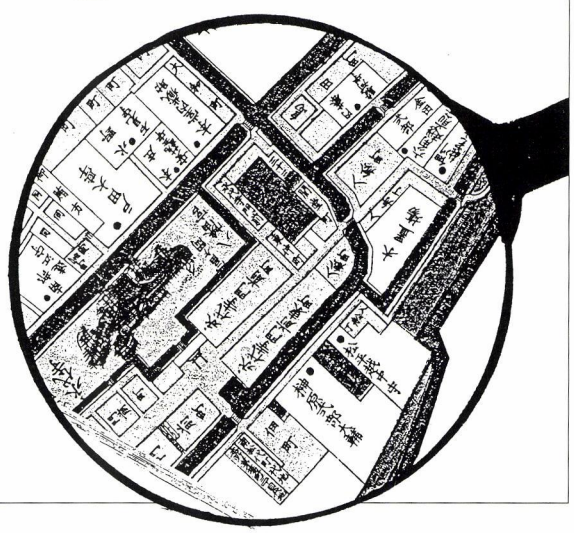
風薫る旅の始まる古石場

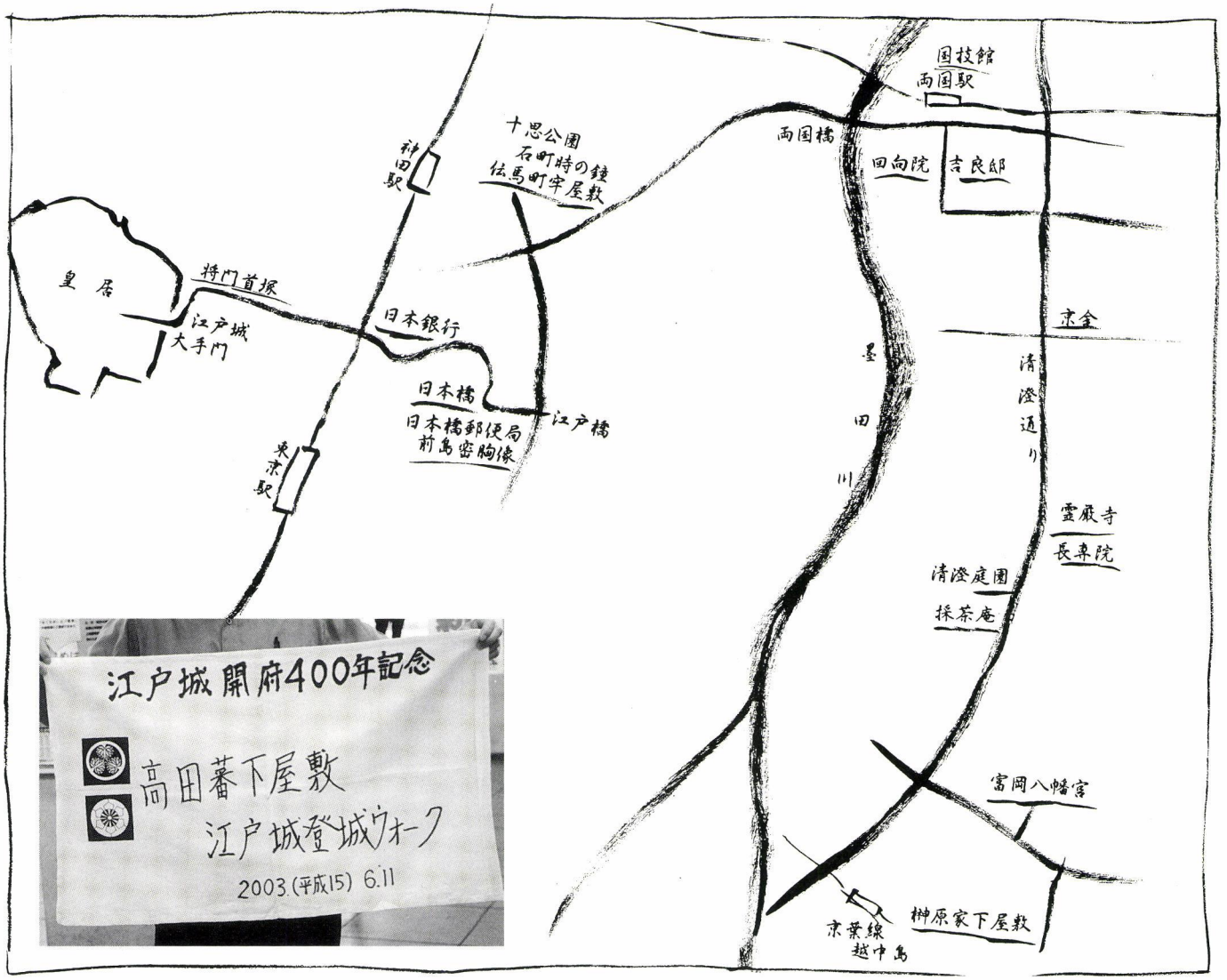
折りしも、センターでは小津安二郎生誕百年記念で展示コーナーが設けられてあったが、そこはパス。九時四五分の出立である。気候は暑からず寒からず、時々薄日の差す陽気は絶好の大江戸散策日和とも洒落ようか。

概略の行程は、隅田川と平行して走っている清澄通りを北へ、両国で西に向きを変えて両国橋を渡ると、神田と東京駅の中間をくぐり抜け、そのまま大手門に真っ直ぐ攻め入る計画である。

藪蚊鳴く横綱力士碑裏おもて

下屋敷から歩を駆って二十分、永代通りを





いざ出陣

突っ切って長い参道を行くと大鳥居があり、正面に江戸三大祭のひとつ、水掛祭りの富岡八幡宮の社殿。大鳥居からすぐ左手の境内に伊能忠敬の像が建っていた。松尾芭蕉は「奥の細道」へ出かける出発点をこのすぐ近くにしたが、伊能忠敬もこの富岡八幡宮を全国測量行脚の起点にした。少し歩いて来てしまったが、われらもここを無事走破の最初の地として拍手を打った。

全国を旅した二人の出発点、芭蕉の方はここから僅か二十分とはなれていない弟子の別荘であるが、富岡八幡宮と縁は深い。同じ江戸時代で時は前後する。が、ふと妙な符合に興味を持った。在所の地名を冠する八幡宮は全国津々浦々、それも地域の拠点に祀られていた。その全国ネットを幕府は見逃すわけがない。間諜とも言われている芭蕉はその八幡宮ネットの庇護の許、悠然とスパイ活動を続けられたとすれば伊能忠敬も裏の生活があってもおかしくはない。NHK放送のテレビ番組の「その時　歴史が動いた」で、伊能忠敬の日本地図を手中にしたシーボルトは国外に追放された。その後、オランダのシーボルトは黒船のペリー提督に手紙を送り、「開国にあたり、日本に強硬手段をとることのないように」進言した。妻子を残して来た日本に尽くしたと言われているが、それも地図を餌に裏取引したとあれば、どこの世にも通じる事かもしれない。

もう一つ、富岡八幡宮には重要な歴史の事実として、江戸勧進相撲発祥の地を看板に掲げていた。両国へは歩いて小一時間、なぜ相撲の中心がそこへ移ったのか、調べればわけ

なく解明されるに違いないと、谷風の手形に自分の手を乗せてみた。

永代通りを西へ行き門前仲町から北へ折れ曲がって十分ほどで、仙台堀川脇に芭蕉像が旅姿で床机に腰を下ろしていた。芭蕉の門人杉山杉風が別墅（べっしょ）「採茶庵（さいとあん）」跡で奥の細道への始め、旅立ちの地である。

花菖蒲五人の列の止まりけり

仙台堀川が分けて流れている南に「採茶庵」あれば、北は紀伊国屋文左衛門の屋敷跡「清澄庭園」である。彼はまた、芭蕉の高弟、榎本其角に師事し、紀文と言う俳号を持ち、上野寛永寺の根本中堂普請の余材で永代橋を架橋して、富岡八幡宮に総金張りの神輿を三基奉納していた。俄然、講談調で面白くなって来たと思ったが、庭園の入り口が分からない。

そこで、公園とおぼしき空間でゲートボールに励んでいらっしゃるご老人に声を掛けて案内を請うた。その老人、かなりハイな方で、桜の満開の頃はここは見事であると、口角泡を飛ばす勢い。その写真があるから持って行けと渡された。結局ゲートボール場の裏が清澄庭園であった。

余談であるが、女性陣が向いのお菓子屋で、塩大福を見つけて来てくれた。十時半を回っていたので、丁度小腹の空く頃で、心優しい乙女会には感謝である。

脇道をぐるっと回って、明治期に建設された庭園へ入ると気持ちのよい景観が待っていてくれた。大きな池を中心に回遊式の林泉庭園は青空と鯉と亀が心を和ませる。丁度花菖蒲の頃で句会の女性が賑やかであった。全国から集められた名石を辿って行くと芭蕉の句碑〝古池や　かはづ飛び込む　水の音〟に突き当った。近くには深川江戸資料館と芭蕉記念館もあるから江戸文化の集結地と言っても過言ではない。

資料館のすぐそばには、榊原家の菩提寺「霊巌寺」、その脇道をそれた所、塔頭「長専院」に五代榊原政倫（まさとも）（越後村上藩主）の墓を見つけた。道路脇にある墓は我等に発見の喜びを与えてくれたのである。

夏そばの主はお江戸のおろし蕎麦

十二時を過ぎると陽が照り出した。我等は清澄通りの北上を続ける。皆一様に無口になる。リーダーは知らん振りで、それも早足だ。

「腹へったのう……」

「何がいい。オリャ何でもいいが、出来れば江戸前のうなぎが食いたい」

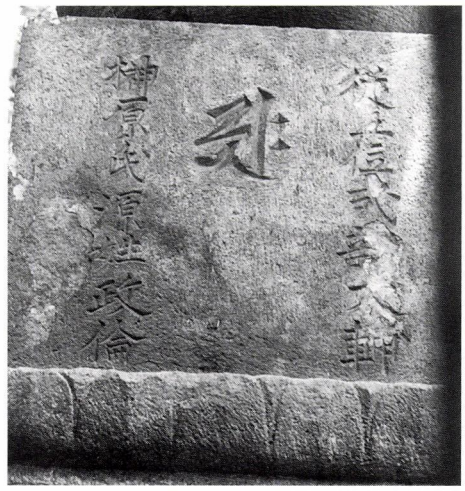
道の向いにうなぎ屋の看板、こちらは打ち水をした蕎麦屋の前で、先に行くリーダーを呼び返す。リーダーはひとりお握り持参で、「どこか握り飯を食える所を探していた」と、とぼけた事をいう。結局、天保二（一八三一）年創業、石臼挽き手打ちの蕎麦屋〝京金〟でお昼を摂ることにした。後で聞いたのであるが、ここの蕎麦は名が通っているとのことであった。通のお客に混じって、リーダーは大胆不敵にもでかい味噌漬入りの握り飯をぱく付いていた。御代は高いが満足である。

下町の地図に薄暑のつのりつつ

江東区から墨田区へ、東京高速道路のガードをくぐって西に歩を向ける。この辺は製本



伊能忠敬の像前で


榊原第五代榊原政倫

注　榊原家の屋敷（嘉永二年版「江戸切絵図」）
上屋敷　神田神保町界隈
中屋敷　池之端（旧岩崎邸）
下屋敷　江東区大島四界隈
　　江東区古石場界隈

屋が目立っていたが、紋屋があったので珍しくなつかしくて写真に撮った。和服の衰退激しい今日この頃、ましてや、紋付を着る人など数えるほどであろう。なつかしかったのは、亡母が内職に刺繍の紋付けを業（なりわい）としていた頃を思い出したからであった。

講談の世界はまだまだ続いて、赤穂義士討ち入りの碑のある吉良邸跡、本所松坂町公園に辿り着いた。オリエンテーリングの猛者であるリーダーは地図を頼りに我等を導く。目差すは吉良上野介義央ただ一人。だが、十畳敷き位の狭い空間に首洗い井戸、上野介の碑、清水一学の碑がひしめいている様は哀れだ。「ここを見舞ったのだから……」というリーダーの言葉で、翌日、香煙絶えぬ、大石内蔵助以下四十七士が眠る高輪泉岳寺を雨の中お参りした。立派な墓と〝赤穂義士記念館〟もあるそこを見て、悪役はやはり今でも疎外されているという思いが消せなかった。

渡船ゆく両国橋のつばくらめ

両国駅と平行に歩いて、明暦三（一六五七）年正月の大火「振袖火事」で焼死した十万人を超える無縁仏を弔うため四代将軍家綱によって建立された回向院を訪ねる。鼠小僧次郎吉や竹本義太夫らの墓、相撲力士の碑があり、多彩だった。

両国橋の手前の車道は向い側が混んでいた。と、その時サイレンが鳴ってパトカーが列から飛び出してきた。国技館の方へ左折すると、すぐにサイレンを止めた。渋滞にいらついたパトカーの官権逸脱行為も甚だしいと感じた。「勝手なことをするから、日本が駄目になるのよ。特権なんてないんだから」

主婦歴、何十年かの〝乙女会〟のオバちゃんがのたまわった。そもそも、〝乙女会〟なるものは、私設水泳教室のお仲間ということで、政治経済から夫婦問題までその話題の広さは侮り難いものがある。

怒りは両国橋から見た都心のビル群とひらっべったい運搬船の行く隅田川で癒された。この両国橋は、下総（本所深川）と武蔵（江戸・日本橋）を結ぶ江戸時代の交通の要衝であった。コンクリートの欄干に凭れながら、両国の花火をチビたわが祇園祭の花火とダブらせた。花火大会を一つにして、日本海で打ち上げられないか……と。

萬緑や日本銀行日本橋

二時半、二代将軍秀忠の時代、人々に時刻を知らせた鐘楼（石町時の鐘）のある十思公園で一休み。近くにある伝馬町牢屋敷跡の立看板下に椿のような赤い花が小さく一輪首をもたげていた。

地下鉄新日本橋駅の交差点を南へ、疲れてはいたが、また、「ここまできたのだから…」というリーダーの言葉に励まされて、江戸橋を越えて〝郵便発祥の地〟のある日本橋郵便局を訪ねた。わが郷土の偉人、前島密の胸像と記念碑が職員通用門の片隅にあるのは官権のご都合主義に思えてならなかった。そんな御託を並べても何の得にもならない……、とばかり、慶長八年（一六〇三）、家康によって架けられた全長七〇メートルほどの木造の太鼓橋、日本橋へ急いだ。勿論今はコンクリートで、江戸の香りのするのは十五代将軍慶喜



前島密の胸像



国を分ける両国橋



江戸の風情を残す職人のまち

の筆による橋柱の「日本橋」という文字だけである。この橋を基点に五街道が整備された。橋の上には「日本国道路元標」があり、国道の基点ともなったのである。

かなり、疲労感があった。丸の内ビル街を無口のリュック隊が行く。日本銀行の無表情なビル、重要文化財の旧館を見ても、この中で行われているヘドロのような人間劇を予想しただけで何の感懐も持たなかった。むしろ、三井物産と日本長期信用銀行の間に立つ平将門の鎮魂碑、京でさらし首にされたのがここまで飛んできたという憤怒の方にやるせなさへの同情を感じた。

薫風の二万二千歩大手門

ビル街を抜けると急に視界が広がって、皇居のお堀と緑がいちどきに姿を見せた。江戸の歩き始めから、ここまで二万二千歩と同行者の万歩計が語る。しかし、時刻は四時半を回っていた。何と、ここの閉門は四時、どおりでみんなぞろぞろと出て来ると思った。これでは、江戸城登城を果たせぬは留守居の家族にも申しわけがたち申さぬ。……というわけで、翌日、再びここへ来ることにして、むなしく上野の宿に撤退を余儀なくした。

梅雨の傘たたみ本懐果たしけり

朝、起きると雨であった。前夜の祝宴が後を引いて頭が重い。それでも地下鉄白金高輪駅から長い道中を泉岳寺参詣、ＮＨＫ放送博物館などを見学して、午後二時皇居に着く。

中は想像を絶する広がりであった。城門の太柱、城石の大きな自然石、松の廊下跡を片隅に抱いた本丸跡はサッカー競技場のコートが一面できそうであった。何やら、世の不条理を感じ、馬鹿馬鹿しくなって来た。その上、入る時に垣間見た警官の、小さい違反を大きな犯罪にまでしようという態度は、理不尽を通り越して滑稽ですらあった。

そんな中、猫が一匹前に踊り出て来た。雅楽と武道の練習場を両側に従えた道路を突っ切ってすぐ近くの石段の上に乗った。

カメラを向ける。

すると、脇からもう一匹出て来て、「フー、」とカメラを牽制して、前の猫をさも、いとわしげになめ始めた。「これは、おれのもの（猫）だ」といわんばかりであった。

己がためという我欲は猫の世界にも、ここの風俗か伝統の様に息衝いているのを感じた。

こうして、我等の開府から四百年を経た江戸城散策は終わったのである。

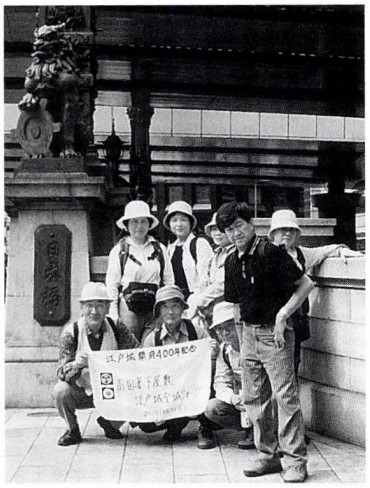
吉越　泰雄　文芸たかだ編集長
飯塚ふじ尾　ペアーレ上越「俳句入門」同人



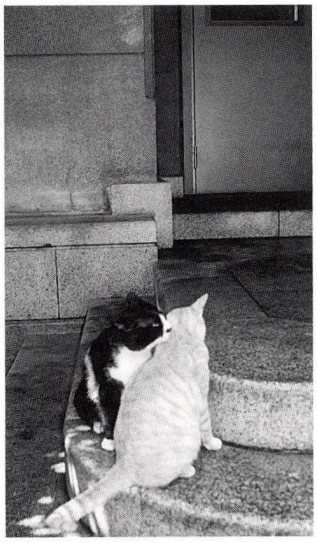
江戸城内



閉園！　残念！



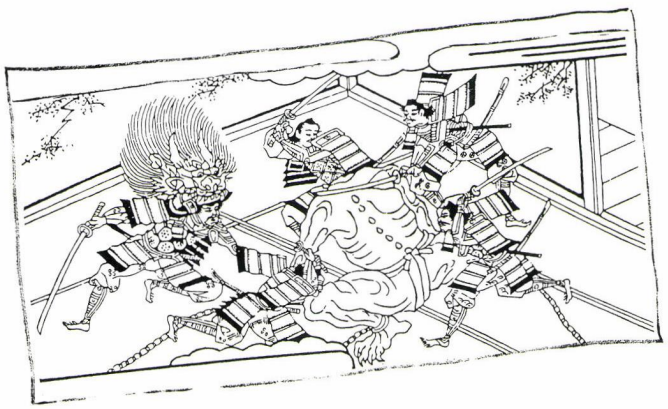
日本橋にて



フリースペース

越後から大江山へ行った酒呑童子と茨木童子

三田村　優
みたむらまさる



酒呑童子が越後生まれと聞いて驚き、さらに大江山では神様と祭られているのに二度びっくりした。驚きのままに酒呑童子の資料を尋ねまとめてみた。

鬼と悪党

支配体制に反逆する勢力は時には「鬼」と呼ばれ「悪党」ともいわれた。またこの鬼や悪党は、都合のよいときは体制側に立ち、悪くなると悪党に変身していた。また、悪党の仲間は疲弊した農民ではなく、ある程度の有産階級の若者たちである。

昌泰二年（八九九）九月に上野国へ出した大政官符に、この頃強盗が蜂起しているが、「富豪の若者」である。とその取締りを指示している。

貴族の荘園支配に反抗した現地の代官や武士は悪党と呼ばれ、次第に武装集団化して山奥や孤島に根城を作り、人里に出没して食料や日用品を奪って逃げるゲリラ的集団であった。なかには武士や僧侶・神官との血縁地縁で結ばれた者もおり、それらは危害を加えることがないので、地元住民の支持を得るようになった。そのため中央からの討伐命令が出ても実行されなかったという。

このような悪党は世界各地にいて、中世後期西ヨーロッパ各地のRaub-ritterと呼ぶ盗賊騎士やrourierという武装集団は、戦時は君主や諸侯の傭兵となり、平時は略奪・暴行をして各地を移動していたという。また中国の水滸伝の豪傑やイギリスのロビンフッドの話もこれに属している。

日本には大江山の鬼の他に次のような鬼が有名である。

東日流（つがる）の荒吐（あらばき）鬼（青森県）

温羅（うら）　桃太郎伝説の鬼（岡山県）
安達ケ原の鬼婆（福島県二本松）謡曲「安達ケ原」
鬼女紅葉（長野県鬼無里）謡曲「紅葉狩」

酒呑童子物語

平安時代の中頃、都の貴族の娘たちが次々にかどわかされるという事件が続いた。時の帝（みかど）が陰陽博士に占わせると大江山の酒呑童子という鬼の仕業だという。

帝から「大江山の鬼を退治せよ」と命令が出され、源頼光と藤原保昌が坂田金時、渡辺綱らを引き連れて山伏姿に身を隠して大江山へ攻め込み、だまし討ちにして鬼退治する。というのが物語の概略であるが、この酒呑童子物語は、藤原道長を頂点とする都の貴族に反抗して敗れた地方民衆の頭（かしら）をモデルに、貴族政治体制批判、反乱への戒めとして作られたものという。

その原点は中国唐時代の伝奇小説『白猿伝』で、酒好きの白猿が計略で手足を縛られ殺される話であるという。

酒呑童子の最古本は逸翁美術館所蔵（大阪府池田市）の「大江山絵詞」（重要文化財）という絵巻物で、その元は香取神宮（千葉県佐原市）の「香取本大江山絵詞」だという。

室町時代に「酒呑童子物語」が大江山系と伊吹山系に分かれていくつか書かれた。伊吹山系の酒呑童子の代表作がサントリー美術館蔵「酒呑童子絵巻」（池田家旧蔵）である。

能楽が盛んになると、世阿弥とも宮増（みやます）作だともいわれている謡曲「大江山」が武士社会に広まるようになった。

酒呑童子の生い立ち

酒呑童子の里、大江山（千丈ケ嶽八三三メートル）は京都府加佐郡大江町にあり、鬼飛び岩、鬼の足跡、鬼稲荷神社、鬼の岩屋、酒呑童子の里、日本の鬼の交流博物館などがある。しかし、童子の出生地は越後とか近江といわれている。

「御伽草子」は鬼の親分といわれる酒呑童子の出生地を越後としている。

弥彦山麓には、酒呑童子出生に関する伝説が残っていて、国上寺（こくじょうじ）（分水町）には、「大江山酒呑童子絵巻」が残され、酒呑童子の生い立ちが詳しく記されている。

伊吹山の酒呑童子

「奈良絵本酒呑童子」には、嵯峨天皇の頃、比叡山延暦寺に酒呑童子という不思議な術をする稚児がいた。怪しんで素姓を調べると近江井口の須川長者の娘・王姫の子で、伊吹大明神の申し子であった。

三歳の頃から酒を呑んでいたので酒呑童子と名づけられ、十歳のとき比叡山の伝教大師の下へ稚児として弟子入りする。

あるとき、帝が新しい内裏に移られた祝いに、比叡山の僧三千人が精魂を込めて作った面を付けて京の都へ鬼踊りに繰り出し、大変な人気を博した。鬼踊りが終わって山に帰り盛会を喜んで宴会をした。酔いが覚めて童子が鬼の面を取ろうとすると肉に食い込んで取れないのである。ついに酒呑童子は、比叡山を追われて生まれ里へと戻された。

しかし、鬼になった童子は親にも見捨てられて山々を転々としていたが、最後は大江山へたどり着いて住んだという。

国上寺の酒呑童子

桓武天皇の皇子・桃園親王が流罪となってこの地へ来たとき、砂子塚城主・石瀬俊綱が妻と共に従者としてそれについてきた。

この石瀬俊綱夫婦には子がなかったので、夫婦は信濃の戸隠山に参拝し祈願したところ見事懐妊した。しかし胎内の子はなかなか産まれず三年間も胎内にいて、ようやく産まれてきた。

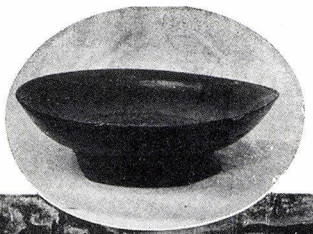
産まれた子は外道丸と呼ばれるほどの乱暴者で、困った夫婦は、外道丸を国上寺へ稚児として預けた。

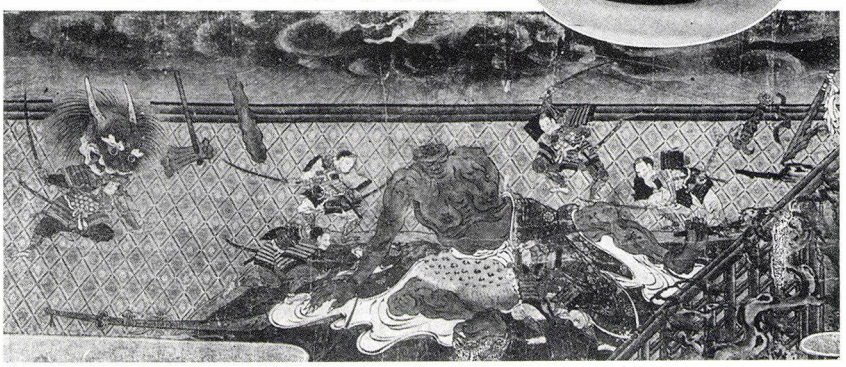
成長するにつれて外道丸は、美貌となり多くの若い女性たちから恋慕されるようになった。そのうちに外道丸に恋慕した娘が次々に死ぬという噂が立った、そこで外道丸は、これまでにもらった恋文を焼き捨てようとしたところ、煙が急に立ち込めて気を失った。しばらくして気がつくと、外道丸の姿は見るも凄惨な鬼に変わっていた。

驚いた外道丸は、身を躍らせて一気に戸隠山へ飛んで行った。そして、しばらく戸隠山に住んでいたが、やがて丹波の大江山に移り住んだという。

五智国分寺の酒呑童子

藤澤衛彦著『日本伝説研究』（昭和一〇年）には、五智国分寺の雛僧だったとしている。


酒呑童子盃


越後國 國上山國上寺 酒呑童子繪巻物

昭和初期の国上寺の絵はがきより

しかし、この話は地元には流布されていないので、国上寺との混同と思われるが、地元の話なので紹介する。

酒呑童子は幼少の頃、五智国分寺の雛僧であった。希に見る美貌で、僧院の人々ばかりではなく、多くの女人から恋慕されるが、まだ恋心が分からず数多く寄せられる恋文はそのままタンスにしまい、ひたすら仏道に精進していた。

ある日のこと、想いを寄せていた一人の女が近くの淵に身を投げて死んだ。それを見た童子は人の情けの哀れを知り、身を震わせ泣き崩れた。それからの童子は一変して想いを寄せる女人と情を通じるようになり、やがては女人を次々に犯して遊び狂うようになった。

ついに国分寺から追放され、仲間と悪行を重ねながらいつか丹波の大江山を棲家にしたという。

筆者の藤澤衛彦は、越後から丹波までの酒呑童子の足取りを尋ねたが、明らかにできなかった。しかし越後国府から船で越中国府に向かったと考え、富山県の謝水郡萬松山翁徳寺に酒呑童子を退治した渡辺綱の元結（もっとい）があること、橋下條村の寺村文左衛門方に太刀一振があり、布谷集落にその子孫がいることを確かめたという。

酒呑童子の副将「羅生門の鬼」茨木童子

茨木童子は酒呑童子の副将として大江山町と福知山市の境にある「鬼ケ城」を砦にしていた。江戸中期の『丹哥府志』にも「鬼ケ城に鬼の岩窟あり、入口の広さ五尺ばかり、縦七～八尺、昔、茨木童子というものここに住す。けだし大江山酒呑童子の一類なりという」とある。

茨木童子は、酒呑童子が源頼光に退治されたとき出かけていて難を免れ、帰ってきて卑怯な「だまし討ち」でやられた酒呑童子たちの仕返しを決意し、すぐに手下を連れて京都へ出て、夜になると羅生門など人々に目につく所を占拠して、奢る藤原道長など貴族たちを襲撃した。

この茨木童子退治を命ぜられた源頼光の家臣渡辺綱が夜中に羅生門へ出かけた。しかし鬼の姿がなかったので家へ戻ろうとしていると、美しい貴族の娘が歩いているのに出会い、こんな夜更けに娘のひとり歩きは危険だと思った渡辺綱は、娘を馬に乗せて送ることにした。この美女は、じつは茨木童子の変装で、一条戻り橋で渡辺綱と激しくと渡り合うことになった。隙をみて鬼の姿になった茨木童子が渡辺綱の襟をつかんで飛び上がろうとしたとき、綱は腰に佩いていた名刀「鬼切り」を抜いて茨木童子に切りつけた。茨木童子は悲鳴をあげて逃げていった。そのあとには茨木童子の針金のような毛が生えた腕が落ちていた。

その腕を屋敷へ持ち帰った渡辺綱は、陰陽師の言葉に従って経文を書いた紙を貼りつけた木箱に腕を納め、七日間外出しないで「仁王経」を唱え続けていた。

その六日目の夜のこと、叔母さんが訪ねてきたが、渡辺綱は陰陽師の言葉に従って「だ

れにも会うことができない」と言うと、叔母は「母親を早く亡くしたお前を一人前に育てた私の恩を忘れて家にも入れないのか」と詰め寄り、強引に家に入り、さらに木箱の蓋を開けさせた。すると「これこそ我が腕なり」といって腕を奪って逃げた。

茨木童子の出生地

茨木童子の出生地には、新潟県栃尾市、大阪府茨木市、兵庫県尼崎市の三説がある。

栃尾市の茨木童子

茨木童子は古志郡の旧家茨木善次右衛門の家（栃尾市軽井沢）に生まれた。幼時から屋敷内の窟に居住して悪行をし、村人に恐れられていた。長じて酒呑童子と共に古志郡太平山を棲家に辺りを荒らし廻った。二人の間に腕力の優劣はなかったが、酒呑童子が奇術に長けていたので、茨木童子はそれに従っていた。

やがて二人は出生地を憚って、部下一八人を引き連れて刈羽黒姫山へ移り、さらに頸城郡賀風ケ嶽に居を移した。ここで国司軍に攻められて戸隠山へと逃げ、さらに従う者数百人を従えて丹後国与謝郡大江山に立てこもった。

そして副将の茨木童子は、近くの丹波国何鹿郡赤見ケ嶽（現鬼ケ城）に砦を構えたという。（「温古の栞」）

栃尾市軽井沢には茨木姓が多く茨木童子の生家跡という家もある。ここでは、奢る藤原道長など貴族に反抗した民衆の代表としての茨木童子がいる。都で奢る貴族達に一矢を報いた茨木童子は、密かに郷里に帰ると地域の発展に尽くしながら余生を送ったという。生家に茨木童子ゆかりの品があったといわれ、近くに隠れ家にして遊んだ岩屋がある。

平成一三年一〇月二八日にはこの茨木童子の里で「鬼祭り」が行われ、地蔵が安置された。

大阪府茨木市の茨木童子

水尾村に生まれたが、幼児期に茨木村に捨てられ、近くの庄屋に育てられ、長じて庄屋の手伝いをしていたある日、客の切り傷をなめ、それから血の味を知り、血をなめる習癖がついてしまった。しばらくして自分の異常に気づいた童子は、前の小川にかかる橋の上から水に自分の姿を写して見た。するとそこには、ものすごい鬼の形相の自分の姿があった。もう人間の世界では生きられないと諦め、大江山酒呑童子の家来になったと伝えられている。茨木市新庄町には「茨木童子の貌見橋（すがたみばし）」があった。（「茨木市史」）

兵庫県尼崎の東富松の茨木童子

東富松のある百姓家に男子が生まれたが、その子には既に歯が生え、髪も成人のように長かった。親族たちは誰も恐ろしく思い、茨木村に捨てた。この捨てられ子がのちに酒呑童子に拾われてその配下になった。ある日、茨木童子が父母が病気だということを聞いて見舞いにきた。父母はそれを喜んだが、親族たちは見るからに恐ろしい姿の茨木童子を見て恐れた。童子は「私は今は洛陽の東寺の門に住んでいる。しかし、再び会うこともないでしょうこれでお別れです」と、父母に別れを告げて家を出ていった。

父母は東寺に安住できるようにと願いながら童子の生まれた所を「東寺」と名づけたという。（「尼崎市史」）

鬼退治した源頼光と藤原保昌

源頼光はその功により陸奥国の征夷大将軍に任ぜられた。その後、この源頼光は都に住み貴族的な生活を送るようになった。そのののちは摂津・伊予・美濃の国司を歴任し、藤原摂関家と接近し、その家司的な存在として勢力を伸ばした。

また藤原道長の異母兄の道綱を娘婿に迎えたり、三人の娘を貴族に嫁がせている。

源氏の武将としては、むしろ弟の源頼信（河内源氏）が「平忠常の乱」を鎮圧して名をあげている。

藤原保昌は再婚した和泉式部を伴って丹後国司として四年間赴任している。今も丹後には藤原保昌の屋敷跡があり、大江山の鬼ケ茶屋の一族もこの末裔といい藤原姓を名乗っている。

また、和泉式部の住んだ庵跡のある山中村もある。

プロフィール
一九三二年板倉町に生まれる
県内公立学校教員を歴任
上越市立国府小学校長を定年退職
上越市五智三－八－九

海の総合的試験研究機関と共に歩んで



伊藤信夫　いとうのぶお

子供のころ、直江津の浜の小高いグミ林から、荒れた冬の日本海を飽かずに眺めるのが好きでした。潮なりを聞きながら幾重にも拡がる水色の帯を見ながら、「俺はこの海で仕事をするんだ！」とかってに思い込んでいました。高校を出て、長崎大で六年間水産増殖を学んだ後、横須賀の海洋科学技術センター（以下、センターと略）に職を得て、本格的に海と向き合う人生が始まり、昨年で勤続三〇年となりました。センターは私の入所半年前に特別認可法人として法に基づき設立されました。したがって私の歩みは、ほぼセンターの歩みと重なっています。ここではこれまでに体験したり見聞した印象に残っている幾つかを述べようと思います。

センター30年のおおまかな動向

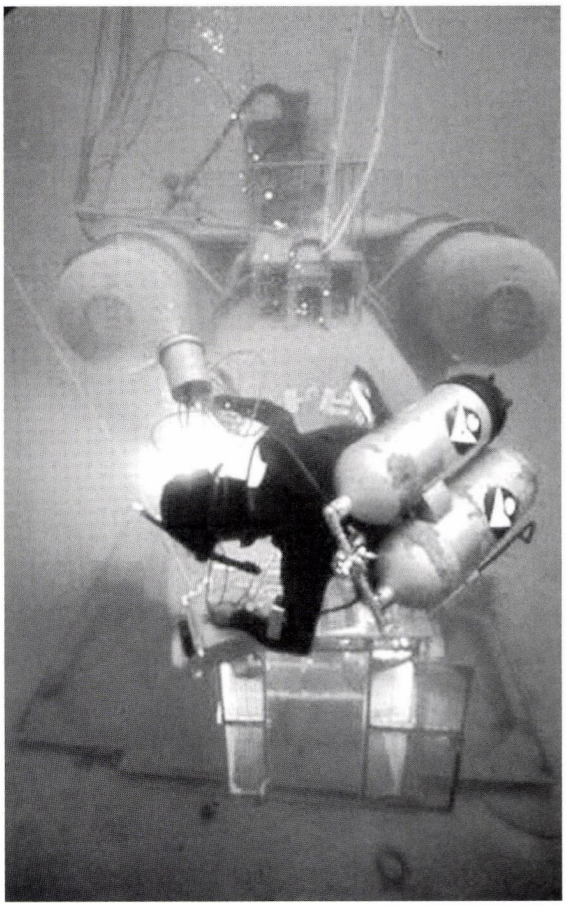
センターでは始めの二〇年間に、外国航海可能な大型の観測船船を五隻、有人飽和潜水システム一式、有人の潜水調査船を二隻、遠隔操作無人海中作業機器を三システムなどを次々に開発・建造または導入し、基本的なアクセス手段を得るとともに、観測・研究・実験に使用しながら、運用や維持管理の方法を確立しました。またこれに加え、研究や調査に使用する採取・計測機器や分析機器、探査機器、観測ブイシステムなどを並行して開発・導入しました。さらにその後一〇年間では、これらを駆使・活用する一方で、さらに多岐にわたる応用的・専門的な研究システム・調査システムの開発・導入が相次ぎ、より総合化・国際化した大型プロジェクトにも

対応できるようになってきました。この三〇年で多くの知見が蓄積されたこともあり、「しんかい6500」による海底研究や、H2ロケットのエンジン部の海底探査など、近年ではセンターの活動がホームページをはじめ、テレビや新聞でも広く知られています。

有人潜水との関わり

設立当時唯一のプロジェクトは「有人飽和潜水技術の研究開発（シートピア計画）」でした。私は学生時代からスクーバ潜水を楽しんでいましたので、二年目から潜水訓練を志願しました。訓練での減圧中に酸素中毒？　で水中で失神し、助け上げられた苦い体験もしましたが、幸い六〇mと一〇〇mの海中居住実験に四名のアクアノートの一人として潜水し、各種の海中実験を体験するチャンスを得ました。自分の目で海中の様子を観察し、考え、肌で水温を感じ、太陽光を感じない水深で、多岐にわたる研究作業の実施者や被験者となることにより、海中と付き合うことの基本的な事項を身に付けられたのは貴重でした。海底から水中ライトに照らされた海中を見ていると、音もなくしんしんとマリンスノーが海底に降り注いでいる様子が、あたかも冬の農道の電灯を透かして見た「ボタ雪の降る夜」のようでとても感動した記憶があります。

またこのプロジェクトの間隙を縫って、潜水を用いた個人の研究課題として一〇数年続けた「沖合海洋構造物における付着生物の生態学的研究」について、学位論文が通った時はとても感激しました。今でも海中に研究者自身が周期的に潜水し、付着生物の調査や観察を続けた貴重な経験は、恐らく誰もできないと自負しています。



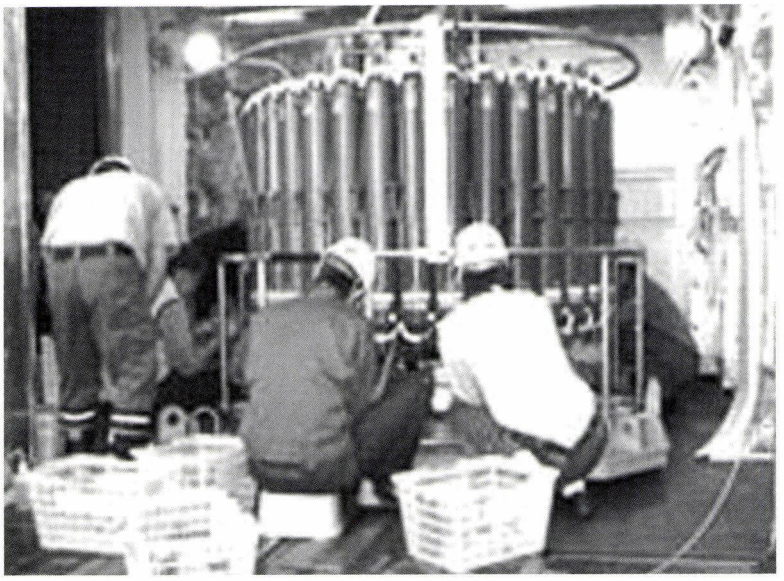
海底 60m での調査作業
（背景は居住したハビタット）

海洋物質循環研究の時代

潜水技術の研究開発の後、組織再編成により海洋物質循環の研究にあたりました。私にとってはこの時期が苦い経験でした。研究の内容は非常に興味があり、面白い課題で幾つかの報告や論文も出しましたが、国際共同研究の流れが押し寄せ、私のこれらの分野での研究の力量と要求される国際的な質とのギャップに悩み、また中間管理職になった折りであり、研究者間の調整にも悩んだ数年でした。これらの研究は、本来その分野での研究実績のある多数の人たちが協力しあい初めて果たせるレベルでしたが、当時はまだこのような研究構造が整っていませんでした。しかし、後年次々と専門の研究者がセンターにも参入するのを待って研究の支援に回った私にとって、必死になってこの時に学び悩んだ内容は、専門でない他の様々な分野の研究を理解するうえで、かけがえのない多くのヒントや判断の根拠となってくれました。

海洋研究は研究者に加え、優秀な支援技術者が不可欠

研究者の生活から離れた私は、センターの研究支援を行っている企業に出向しました。そこにはオペレータや、エンジニア、分析技術者など多分野にわたる若者たちがおり、組織化と実績の確保に奔走しました。センターではプロジェクト研究のほとんどが、研究者のみの力ではできないくらいに巨大化する傾向にあったため、これらの人たちを観測技術



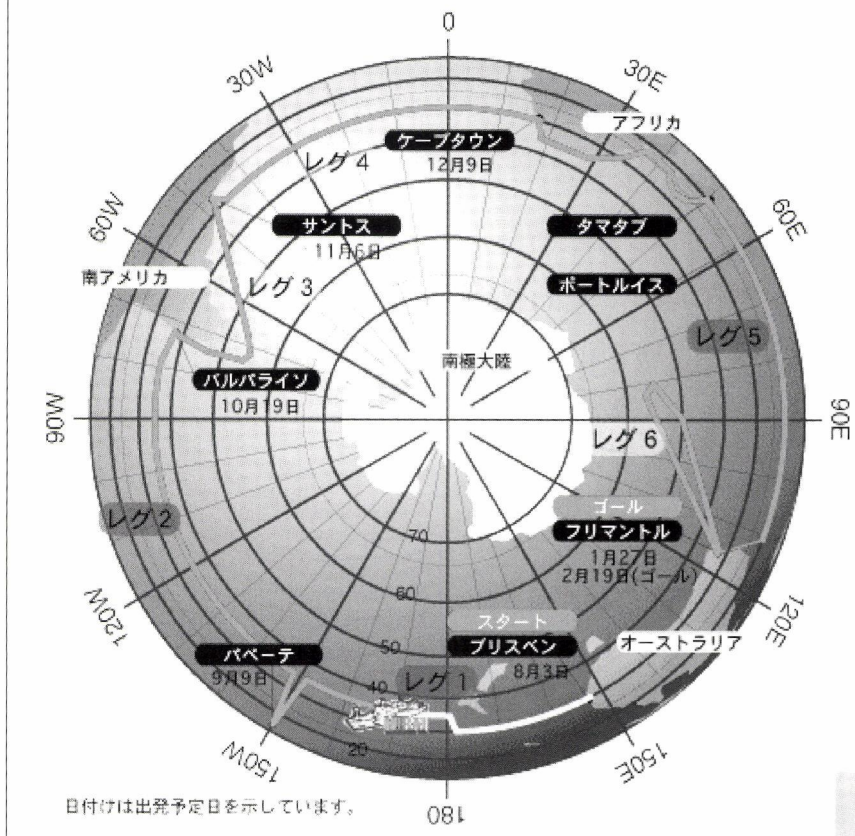


写真上　観測点での採水後、分析用の海水をボトルから分取する観測技術員

写真下　炭素 14 法の分析のため海水前処理システムを運用する観測技術員

員と呼んで、組織的に育成を図っていました。欧米ではマリンテクニシャンと呼ばれ、実績のある優秀な人たちは研究者と対等に仕事をし、安定した高給を得ていることも多いのです。

私が出向したのはこの創成期の四年間で、若くやる気のある様々な分野の素養を持った人たちが参入してきた時期でした。観測技術員たちは、研究者や乗組みの船員さん達に時に叱られ、時におだてられながら、自らも努力を重ね成長し、会社も業務ごとのマニュアル化や標準化の面で、組織をあげて努力しました。その結果、歴戦の観測技術員も増え、船上では運用作業や分析・計測業務などをこなすことができるようになり、研究者数より多い観測技術員が乗船する航海も珍しくなくなりました。人数も今では百人を上回り、船上や沿岸の調査現場だけでなく、陸上のデータ品質管理、分析・計測支援なども担っています。中には研究者でも難渋するような分析システムを使いこなす人たちまで出てきました。これでやっとというか、いよいよというか、研究者と組織化された観測技術員が協力し、次世代の研究開発を担える見通しができました。今後は研究者の仮説を最も合理的・効果的に、しかも安全堅実に遂行できる集団にさらに成長し、支援という受け身から、計画の立案から実施・分析・データ品質管理まで自立し提案できる能動型に脱皮して欲しいと思っています。私は出向中に、彼ら・彼女ら観測技術員達と出会えたこと、共に苦労したことを大変誇りに思っています。



写真左　南極大陸を中心に南緯30°線を周航するBEAGLE－2003の航路

写真下　関根浜港を出向する海洋地球研究船「みらい」



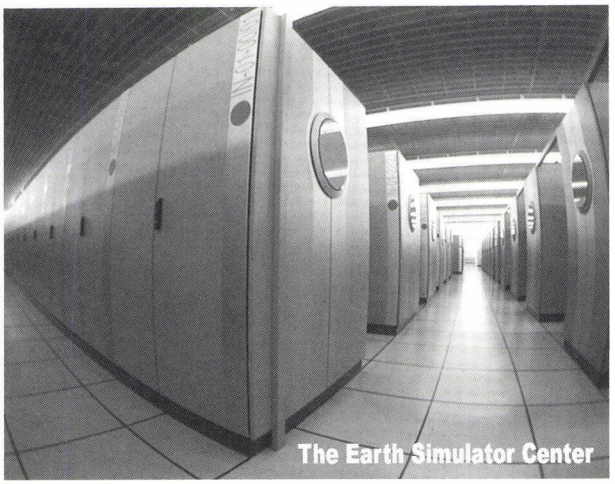
海洋観測30年の到達点
南半球周航航海観測

その後再びセンターに復職し、現在はセンターのむつ研究所を運営しています。この研究所の関根浜港を母港とする海洋地球研究船「みらい」は、ほぼ南緯30度線に添って、八月から来年二月までの予定で、南半球周航航海観測（「BEAGLE－2003」）を開始しました。南極オーバーターンと呼ばれる海水の沈み込みと変成は、大気への熱の放出、大気中の溶存ガス成分の深層貯蔵、海洋の成層構造の維持を通じて、短期から超長期にわたる気候の変化と深く関連しています。この航海では、この南極オーバーターンと三大洋（太平洋・大西洋・インド洋）との相互関連を対象に、地球温暖化等の気候変動にともなう、熱や密度に関する海洋の変化と、二酸化炭素・栄養塩等の物質輸送の変化を明らかにすることが期待されています。また三大洋を同じ船で、同じ研究者群と観測技術員が、同じ方法・精度で海洋の観測を実施するところにも大きな意義があります。蓄えた海洋観測の技術とノウハウの到達点を総合的に世に問うことになり、きっと素晴らしい成果をだしてくれると期待しています。

日々入ってくる航海報告でも、数時間きざみで航走・観測・分析・データ解析が昼夜兼行で行われています。一見、単調な作業の繰り返しですが、作業も分析も、的確かつ世界的に標準化された精度で同質にこなし続けることは至難の業です。航海が無事終了すれば、参画した人それぞれに大きな自信と協同作業

による大きな研究成果に裏付けられ、皆一皮剥けて、「世界のどこに出しても遜色ない精強な観測研究集団ここにあり！」ができ上がると期待されます。

折しも、センターの横浜研究所には、地球シミュレータという世界最速のスーパーコンピュータシステム（市販の高性能パソコン五万台分相当の能力）が完成し、既に多くの研究者が地球環境のシミュレーションに使い始めています。このシステムを駆使することにより、様々なモデルに基づく数値計算が大量かつ迅速に処理でき、「ＢＥＡＧＬＥ-２００３」の成果も貴重なデータセットの一つとして活用が期待されています。



地球シミュレータのスパコン群（横浜研究所）

おわりに

私の三〇年は、海という対象を把握・理解しようとして、「革靴の底を掻いた」だけなのかも知れません。今では「伊藤さんて泳げるんですか？」などと質問され苦笑するばかりですが、渦の中にいた一人の人間としては、「ただの一コマではなかった」と思っています。センターには多くの成果もあれば、目標を十分に達成せずに静かに終了した幾つかの課題もあります。しかし私は後者の中にも、後年何か別の光を与えられる可能性を持つ貴重な経験や情報がたくさんあることを知っています。それらは後続の人たちに伝承され、次の出発に際しきっと大きな糧になると楽天的に思っています。

プロフィール
一九四七年　上越市（旧直江津）生まれ
長崎大学大学院水産学研究科修士課程修了
農学博士（東京大学）
職歴
一九七二年　海洋科学技術センター実験研究部
一九九七年　日本海洋事業（株）海洋科学部長
兼務(株)マリン・ワーク・ジャパン海洋科学部長
二〇〇一年　海洋科学技術センター研究業務部長
二〇〇二年　むつ研究所長

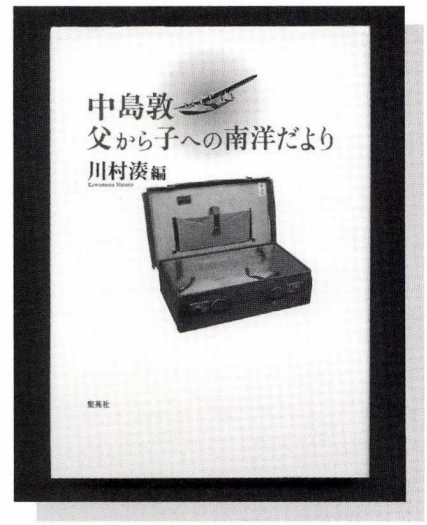


似たようなまち

入り組んだ小路があり、四十物（あいもの）のまちがあり、名呉ノ浦もある。富山県新湊市（放生津）。

奈呉の海の沖つ白波しくしくに
思ほえむかもたち別れなば
（万葉集）

■読書びと



中島敦 父から子への南洋だより

川村湊編

集英社刊
三〇〇〇円

昨秋細君と、横浜港を見下ろす高台の公園に建つ神奈川近代文学館を訪れた。一歩足を踏み入れたときより、外の喧騒と陽光から遮断された空間に身を委ねる。常設展示室の、我が中里恒子『乗合馬車』や阿部昭『鵠沼西海岸』『司令の休暇』などの作品背景を解説する湘南の文学散歩のコーナーを巡り、歌人・吉野秀雄特別展の膨大な量の資料に見疲れた私の前に、一人の男が紡ぎだした幻の時が拡がった。

中島敦収蔵コレクション展と銘打たれた一角には、「漢の武帝の天漢二年秋九月、騎都尉李陵は歩卒五千を率ゐ、辺塞遮虜鄣を發して北へ向つた。…」という『李陵』の圧倒的な書き出しを端正な書体で刻した原稿用紙を中心に、千点のコレクションから精選した資料が展示されている。そして愛用していた皮の旅行鞄の傍らに、時空を超えて人間を凝視し続けた中島が遺した、その愛の葉書が鏤められていた。

中島敦は一九〇九年東京に生まれ、東京帝大国文科を卒業、元町の横浜高等女学校で教鞭をとる。女学生にトン先生と呼ばれ慕われた八年間は、在学中に結婚した最愛の妻タカや長男桓と睦みながら暮らし、外地を旅し花を育て和歌を詠む、生涯至福の時でもあった。一九四一年喘息の転地療養も兼ね、日本の植民地であったミクロネシアのパラオ島に「南洋庁国語編修書記」として赴任する。翌年帰国後『山月記』『光と風と夢』を発表し作家として僅かに注目されるも、宿痾を悪化させ四二年十二月に三十三歳で夭折した。教科書の定番『名人伝』や珠玉の佳品『李陵』が世に出たのは死後のことである。

単身赴任中、約半年の間トラック諸島やサイパン、テニアンなどの島々を視察旅行する中島は、船や宿舎の中から妻や国民学校二年生になった桓、そして前年生まれた数え二歳の次男格、の家族に向け沢山の手紙や葉書を送り続けた。

九月二十七日にマーシャル群島ヤルート島で投函された「中島桓君」宛の、朝焼けの海辺に並ぶ椰子の木、の絵葉書にはこう書かれている。

今朝　ヤルートに
つきました。低い、ほそ
長い島です。大きな
なみ　が　來たら、島中
水をかぶつて　しまひさう
な氣がします。けれども
このへんは　なみ　が　とても
しづかなので、そんな
しんぱい　は
ありません。（ペンの運びのままに改行して収録）

『中島敦　父から子への南洋だより』は近代文学館での展示と期を同じく昨年十一月に上梓された。写真版で見開き二頁に、絵葉書の表書きと文面、裏面の絵や写真を載せ、どの絵柄を送ろうかと楽しく選んだであろう、その想いと、筆跡の温もりを見事に構成している。

おとうちゃんあのね…、とはじまる息子からの手紙や、毎日のように綴った妻への便りを組合わせ、当時の南洋群島を紹介する写真・図版を配した見事な編輯は、川村湊の手による。

『「大東亜民俗学」の虚実』（講談社）他多くの論究で、旧日本植民地における文学と思想の在り方を再検証している川村。中島敦の南方体験という文学史の視点と同時に、父親が撚りなす家族の絆、言霊としての日本語、今の私達が喪なったものに拘りぬいたその仕事に編者の真面目をみる。

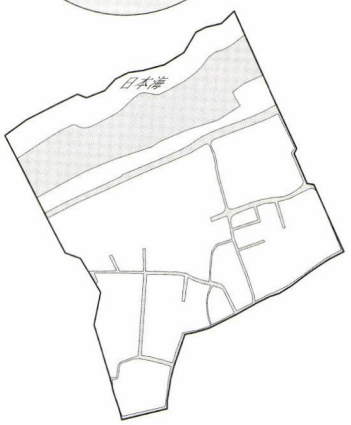
口絵の八頁だけでなく八十一通の手紙全てをカラーで貼したかった、と思うのはオリジナルに向き合ったあの時間が心に刻まれたからだ。

美術館とは異なり、コレクションの質量で存在意義の測れない「文学館」。文字の重みを形に表すとは如何なる事か…。困難な課題に応える関係者の想いが届く展示と出版であった。（斟）

屋台まち

「直江津」とはなにか？
現在、祇園祭に屋台を出す町名の元になったのは、昭和27年の町内統合にあります。後に、祇園祭の神輿が巡幸しない町内も屋台を出すようになり、今のような19町になりました。祇園祭に屋台を出さなければ「直江津」じゃないのか？という反論を覚悟で、屋台を通して町内を訪ねることによって「直江津」が読み取れるのではないか、という大胆な仮説(？)のもとに取材してみました。(取材・江塚)

善光寺浜
ぜんこうじはま



善光寺浜の由来は、上杉時代、現在の十念寺の場所に善光寺があったことに拠ります。上杉謙信は川中島の合戦で荒れた信濃善光寺の本尊をこの地に移し安置しました。海辺に近い善光寺ということから、浜善光寺とも言われました。また、浜善光寺の周辺は門前町として栄えたといわれています。

善光寺浜は現在の五智2丁目にあたる町内で（信越化学の宿舎のある一区画は御幸町)、国府小学校区の子供たちが祇園祭に参加する唯一の町内です。善光寺浜が祇園祭に参加するようになったのは比較的最近で、昭和50年代に入ってからです。直江津の市街地から引っ越してきた人たちの要望により参加するようになりました。

十念寺の前の旧北陸道は砂丘の中腹にあり、海に向かうと上越病院の裏手あたりから急に坂道が多くなり、砂丘のまち特有の景観が形成されています。

現在は住宅地となってしまいましたが、御幸町の砂山同様に、昔はこの辺りの砂丘でも通称「台場」でスキーをしていました。また、現在の水族館か上越自動車学校のあたりにはきれいな水源があり、また長く直江津の水道の水源地もありました。

十念寺には信濃の善光寺同様に本堂の下に戒壇めぐりがあり、また境内には近くの浜から出土した中世の石塔が多数あります。

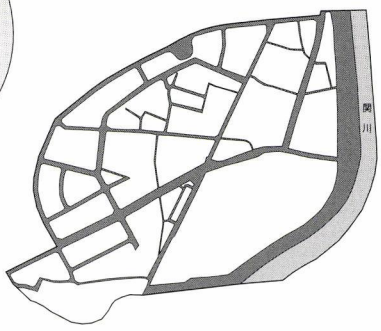

坂の下に市街地が広がる


善光寺浜の屋台

●まちのめじるし●


十念寺

東雲町
とううんちょう



命名の理由は定かではありませんが、東雲（しののめ）とは夜明けのことで、旭区同様に縁起を担いだものと思われます。至徳寺区といわれていた町名を昭和30年代の町名改正で、東雲（しののめ）としましたが、当用漢字では東雲を「しののめ」と読まないとか、古臭いという理由で「とううんちょう」と変えられました。

東雲町はJR直江津駅の南側に位置し、明治期までは至徳寺村といわれていました。地名のとおり、室町時代の越後守護上杉氏の菩提寺である至徳寺のあったところです。壮大な境内に七堂伽藍が配されていたといわれています。現在の徳泉寺の境内からは至徳寺があった痕跡を示す石塔が見つかっています。また、駅南の区画整理に伴う発掘調査で、守護所跡と思われる巨大な遺構が発掘されました。

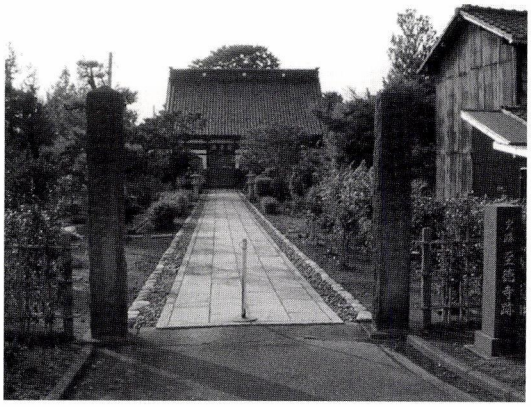
近世に入ってから、直江津の衰退とともにこの辺りも荒廃し、現在の新潟労災病院から直江津駅にかけては湿地帯で、明治31年、直江津駅が現在の場所に移されてから駅周辺の開発が行われてきました。

東雲町の屋台は20年程前に八幡から譲り受けたもので、青年会が中心になって、修理を重ねて、現在に至っています。

町内にはJR直江津駅がありますが、港と鉄道の町である直江津のシンボル的な存在となっています。



●まちのめじるし●



徳　泉　寺



自由通路から広い直江津駅構内を望む



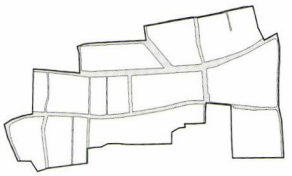
塩浜町の屋台

塩浜町 しおはまちょう

町名は、かつて塩焼きをしていたというばかりではなく、江戸時代に能登の嶋之地小浦から移住して(藩の圧制から逃れて)きた人たちが塩焼きをして開いた塩屋新田村に由来するようです。

明治期はこの辺りにはほとんど民家はありませんでしたが、旧中島区にあった遊郭が火災を機にこの場所に移ってきました。その頃からこの辺りも発展してきたと思われます。

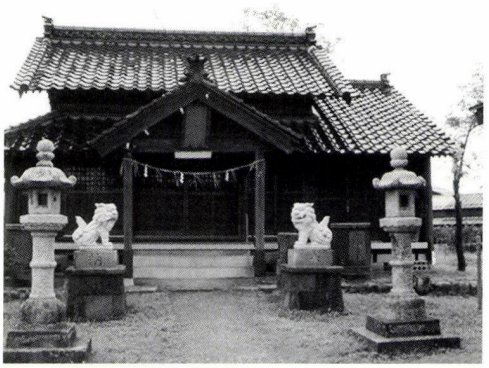
現在の屋台は昭和20年代後半につくられたもので、漆塗りの船形屋台で形はオーソドックスですが、19町内の中でも特に飾りが多いのが自慢だといいます。また、遊郭が栄えていた頃は、店のお姐さんたちも屋台の巡航に参加し、一際目立つ屋台といわれました。



●まちのめじるし●

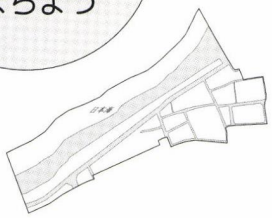


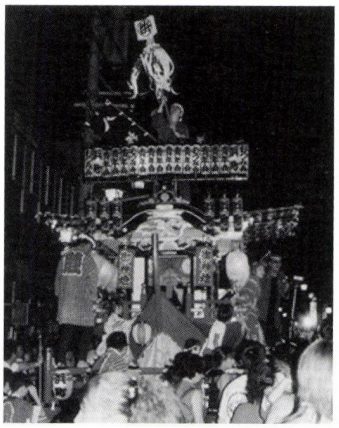
あづま湯：直江津に唯一残る銭湯。館内には男女各浴室にモザイクタイル張りの3つの湯船があり、現在も薪で焚かれていて、地域のお年寄りを中心に利用されている。建物は正確な年代は明らかではないが大正期のものだと言う。



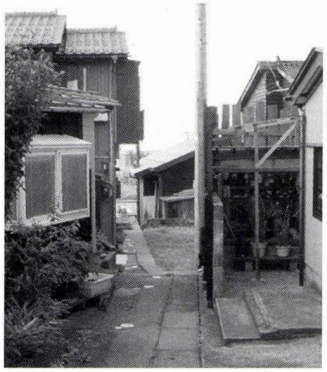
能登から移住した人たちが建立した日の宮神社

浜町 はまちょう





浜町の屋台



まちの風情

浜町の地割は、隣接する福永町や塩浜町のような短冊型のものではなく、このことからも町の成立が新しいことがわかります。商業地としての性格を持つ塩浜町とは違って、宅地として発展してきたため旧跡と言われるものがあまりありません。

昔はこの辺りも砂丘地で、昔の直江津の子どもたちは、ここから現在の国府小学校あたりまで“探検”をして遊んでいたといいいます。

浜辺は広く、現在よりも150メートル程も沖に渚があり、夏は海に着くまでに足が焼けてしまったそうです。河口分離による港の変化と関川の浚渫により浜辺は狭くなってしまいました。

現在の屋台は昭和39年頃、沖見町より譲り受けたもので、その後改修し現在に至っています。り塩浜町と同様に漆(カシュウ)塗りの舟形屋台です。

海西東陸



これは聞いた話で、ずいぶん昔の話になるが、ある劇団（新劇のような劇団）が地方回りをしていたとき、山陰のとある港町で、公演の合間に町を散策していたら、港の市場で、おいしそうなアンコウがトロ箱に入っている。値段を聞いたら、あまりの安価に、さっそく買って、アンコウ鍋でもやろうということになった。

さて、次の公演が始まって、ふと見ると、あんなに盛況だった観客がいなくなってしまった。不審に思った団員が、町の人に「何か、団員に不都合でもあったのか」と、問い質したところ、

――あんなものを喰う人間は、

不審者に違いない――

という噂が町じゅうに広がっていたのだという。

＊

江戸時代の料理本に「吊るし切り」が出てくるので、食べられていたのは間違いないが、わが地では、ごく最近までほとんど食べる人はなく、今でも「あんなもの」と言って食べない人もいる。

アンコウは深海魚で、北海道からフィリピンまで分布する。水戸では「梅の花が色づくころまで」といわれ、冬の料理として有名である。

鮟鱇をふりさけ見れば厨かな

其角は、吊るし切りを水戸で見たのか、江戸で見たのか。

雑誌やテレビなどで、冬が近づくと「アンコウ鍋のおいしくなる季節」とか「吊るし切りの妙技」などと、冬には、あたかも日本じゅうで食されているように紹介されるものだから、食べるもの、あるいは食べていると錯覚してしまう。本来、アンコウなど食べる土地の方が少なかったのではないかと思われるのだが……。また、真名板の上で捌いているのを見たことがあるので、あの切り方だけが正しいとは限らないと思う。

みんな東京中心の一極集中（？）の情報発信がもたらした害ではないのか。

試みに、筆者の手元にある料理本を見ると、気のせいか本格的な料理本にはアンコウの「あ」の字も出てこない。ようやく見つけたのが、志の島忠という名料理人の『料理の口伝』（一九八三年）という本であった。曰く「鮟鱇鍋というのは江戸名物とはいっても長屋で食べるような鍋」で、「けっして客をとるような店で出す料理」では無く、変に「郷土料理づいていろいろな鮟鱇料理が出てきたのはごく最近のことです」とある。そういえば、東京っ子の作家、池波正太郎の魅力的な「食べ物本」には「軍鶏鍋」は出てくるが、「鮟鱇鍋」はまったく出てこない。

食べ物や祭りには「わが地独特」と「日本じゅう」という相反する思い込み、または思い入れの世界が同居しているのだが、単細胞な情報発信者は、そんなことはおかまいなしに「日本じゅう」で発信してしまうものだから、知らない受け取り手は騙されてしまう。それに輪をかけて、土地感の欠落した料理屋が多くなり、おかげで最近は全国的に「鮟鱇鍋」が食べられるようになった。

「土地（ところ）の食い物じゃないから、うちでは絶対に出さないよ」

という頑固おやじがいてもいいと思うのだが……。

（没）

目見る（みるめ）

五智国分寺三重塔（ごちこくぶんじさんじゅうのとう）

国分寺は天平一三年（七四一）、聖武天皇の勅によって国ごとに建てられた官寺で、国府の所在地に国分尼寺とともに置かれました。

越後国府は平安時代の「和名類聚抄」に「越後の国府は頸城郡にある」と書かれているだけで、明確な位置は分かっていません。従って、かつてのような「海没説」はほとんど否定されていますが、いまだに初期国分寺の位置も確定されていません。

現在の「国分寺」は、上杉謙信が永禄五年（一五六二）真言宗で再興したと伝えられ、上杉家の家譜にも高野山無量光院の清胤を導師に、謙信も自ら真言僧として落慶法要に参列したと書かれています。

境内のほぼ全体が高い土塁によって囲まれているのは、寺院の建つ場としては、やや異様ですが、謙信がこの地に国分寺を再建する以前は、武士の居館であったとも推理されています。

上杉家が越後を去った後、慶長一九年（一六一四）天台僧俊海によって天台宗に改宗（この時、関山神社の宝蔵院なども改宗）して、復興され現在に至っています。

境内の最も古い建造物は元禄六年（一六九三）の棟札を掲げる経蔵で、本堂は度々火災を被り、その都度再建されてきました。最近も昭和六三年一月に焼失し、平成九年に再建されたことは記憶に新しいところです。

さて、山門をくぐり本堂に向って右手に見える二八メートル余の三重塔は、上越地方唯一の塔であり、また「越後」では他に中条町の乙宝寺があるのみで、新潟県の寺院建築史を知る上で、貴重な文化遺産であるといえます。（佐渡には妙宣寺の五重塔がある）

寛政六年（一七九四）に焼失した本堂は、天保年間になって再建が始まり、同時に焼失した三重塔も安政三年（一八五六）、ようやく高田の曾武川常右衛門が棟梁となって再建が始まりました。初重と二重が建ち上がったところで棟梁が病に倒れたといわれていますが、慶応元年（一八六五）に上棟しました。しかし明治半ばになっても再建資金の勧進が続いていたようで、落慶とは行かなかったようです。明治三三年ころになって、「棟梁・江崎長三郎」の名が史料に現れますので、その頃から工事が再開されたものと思われます。

彼は名立の人で、新井別院・小黒専敬寺本堂を建て、京都東本願寺の山門も建てたといわれる名工で、関野貞に従って奈良の寺社の調査にあたり、さらには『新選規矩階梯』という専門書も著しています。（『新潟県人物百年史・頸城編』）

工事は、資金難のためか再び中断され、高欄など未完成のまま今日にいたっています。

建物をよく見ると、初層と二層の垂木が軒に直角になる平行垂木であるのに対して、三層は、軒先に向って放射状に広がる扇垂木になっています。また、相輪は五智焼きとおぼしき陶製です。さらに、心柱は礎石に固定せず鎖で釣るとい



子



酉



戌





二層の彫刻

う、江戸後期の特徴を示す工法が用いられています。

塔全体は、どっしりとした重厚な印象を受けますが、そのなかで特に目を引くのは、各階を飾る彫刻です。作者は相当な腕前の持ち主のようですが、残念ながら、名前は明確ではありません。初層には十二支が、北側の中央から各面に三体づつ取り付けられています。非常にリアリティーのある彫りですが、そのなかに不思議な穏やかさがあり、「戌」などは愛くるしささえ感じられます。二層は「二十四孝」と思われますが、半分しかありません。三層に続きが飾られる予定だったのでしょうか。

三重の塔は、未完成ながら毅然とした美しい姿をとどめています。（編集部）

■県指定有形文化財

種　別　建造物
指　定　昭和五一年三月三一日
所有者　国分寺
高　さ　二八・八五m

■境内の他の指定文化財

国分寺山門　市指定（建造物）
国分寺経蔵　附（つけたり）棟札一枚　市指定（建造物）
伝親鸞聖人坐像　市指定（彫刻）
越後国分寺境内　市指定（史跡）

新潟県民歌

作詞　高下玉衛
作曲　明本京静

一、世紀明けゆく西北の
山河新に旭は映えて
県民二百五十万
希望に燃えてこぞり起つ
ここぞ民主の新潟県

二、五穀の宝庫土壌肥えて
尽きぬ越後の野の幸に
文化産業絢爛と
花咲き薫るこの繁華
興せ自由の新潟県

三、日本海の若潮に
弥彦妙高佐渡晴れて
世界をむすぶ観光の
絵巻綾なすわが郷土
拓け詩の国新潟県

四、越佐の天地玲瓏と
今ぞ平和の鐘は鳴る
ああ新しき憲法の
聖き理想を炬と翳し
築け栄ある新潟県

こんな歌を口ずさんだことがあるでしょうか？

昭和二二年、時の知事岡田正平の発案で「新潟県民歌」が公募され、一等賞金二千円と副賞。翌二三年発表された。

今でも、頭のなかにメロディーが残っていて歌うことができるのだが、聴く機会がないので、もう忘れ去られてしまったと思っていたら、県のホームページで「県民歌」を聴くことができるようになっていた。

昭和二〇年代に盛んにラジオで流れていたような気がするのだが、どのような経緯で口の端に登らなくなったのだろうか。

隣県の「海が欲しい」という切なる願い(?)が込められた県民歌の詞とは違って、戦後の民主主義的語句が散りばめられた詞には、県民の心を一つにするものが無かったのだろうか。

＊県民歌制定、作詞者については『おもしろ　えちご塾』(大田朋子著・恒文社)にしい。



越中八尾郵便局

編集室から

今号は図らずも、旅と歌が重なってしまった。

少し前、鉄道の旅があたりまえで、自家用車（こんな言葉も古い？）での旅行など夢のような時代があった。早朝の駅に行ってみると、ほとんどの駅のホームにあった石造りの洗面台に向ってうがいをしたり、蒸気機関車が吐くばい煙で煤けた顔を洗う人を見かけたものである。

筆者もすでに電車の時代の方が長い。信越線がまだ電化されていなかった頃、高崎で電気機関車に替わると、とたんに加速し、急に都会に近づいたような気がして、蒸気機関車など旧時代の遺物になりつつあると思ったものである。にもかかわらず蒸気機関車を見ると郷愁以上のものが胸に迫ってくる。修学旅行の思いでも、中学を終えて働きに出る友人の集団就職列車を見送ったのも、蒸気機関車が引いていた。

「鉄道唱歌　米沢・新潟」は、現在では車でも列車でも僅かな距離の米沢・新潟間を延々と汽車を乗り継ぎ、途中一泊の長旅である。今これをやったら、単なる贅沢三昧の旅になりそうだが、歌詞を見ると、興味津津、車窓に映る景色を飽かず眺め、旅の疲れなど忘れたかのような当時の人たちの姿が彷彿としてくる。

唐突だが、陸奥斗南藩といえば、城地を召上げられた会津藩士がしばし高田藩に預（寺町の寺）けられた後、辺境の地に押し込められるようにして旅立っていった先である。

（ご多忙のなか原稿をお願いしたお礼は別にして）伊藤さん、その陸奥から「遠路」原稿ありがとうございました……。と言おうと思ったら、原稿・写真すべて「アッ」という間にパソコンに届いていた。

訂正とお詫び　夏号（六月二〇日発行）の巻頭エッセイのタイトルは「マニキュア」でした。訂正してお詫びいたします。

投稿募集・内容の問合せ

投稿をお待ちしています。企画、執筆者への感想・意見・反論・身近な随想など、気軽にお寄せください。

フリースペースは、研究論文・提言・意見発表・創作発表の場です。テーマは自由ですが掲載について、多少の審査を行いますことをご了承ください。掲載文には僅かですがお礼をさし上げます。

投稿には、お名前・年齢・住所・電話番号を明記してください。フリースペース以外は匿名も可能ですが、その場合も氏名・住所をお書きください。

あて先

〒九四二－〇〇八二
上越市国府三－九－五
☎〇二五（五四三）九七一五
FAX〇二五（五四三）二〇二五
北越出版内「直江の津」編集部
E-MAIL hokuetu@seagreen.ocn.ne.jp

■バックナンバー■

2001年3月　第1号　春号
年間特集　直江津を掘る
1福永家文書から幕末明治の直江津の町並みを復元する　浅倉有子
2掘ったら何が見えるか直江津　―中世都市・越後府中・直江の津―　小島幸雄

2001年6月　2号　夏号
年間特集　直江津を掘る
3湊町から臨海工業都市へ　―直江津の産業史―　赤羽孝之
4人々のくらしに息づく「祇園祭」　―囃子の伝承を通しての一考察　近藤美保子

2001年6月　3号　秋号
年間特集　直江津を掘る
5フォッサ・マグナを境にした東西日本文化と南北の国土軸　市川健夫

2001年12月　4号　冬号
年間特集　直江津を掘る
6古老が語った直江津の昔

2002年3月　5号　春号
特集　イントル、ナショナル、ヲイル、コムパニー　エドウィン・ダン

2002年6月　6号　夏号
特集　1　米山をめぐる民俗文化　渡邉三四一
　　2　報道のなかの祇園祭

2002年9月　7号　秋号
特集　1　直江津五智遊覧の旅
　　2　直江津の再生　江塚友之
講演　「地球」という館　渡邉　隆

2002年12月　8号　冬号
特集　1　西横山小正月行事
　　2　直江津・五智十二景

2003年3月　9号　春号
特集　「海の恵み」―高田のまちに見える海の印象―
ミニ特集　高田のまちの近代洋風建物
知の楽しみ　日本一のカラスのまち　中村雅彦

2003年6月　10号　夏号
特集　人が支える「頸城」の大地
知の楽しみ　たのしいおいしい考古学　岡村道雄
フリースペース　今町が生んだ力士越ノ海勇蔵　村山和夫
見る目　木造一鎮倚像
わたしの直江津　マニキュア　佐藤光子
読書びと　神谷美恵子 若きこころの旅　太田愛人著

第3巻4号（冬号）　12月20日 発行予定
年間定期購読（4冊1920円・送料込み）を受け付けております。ご希望の方は編集部までご連絡ください。

■「直江の津」が購入できる所　なおえつ茶屋（バックナンバー取り扱い）／柿村書店／エルマールブックセンター／春陽館／ラ・ソネ菓寮

季刊「直江の津」秋号
第三巻三号　通巻十一号
発行日／平成十五年九月二十日
発行所／直江津経済文化研究会
上越市中央二－一－八
直振興業内
☎〇二五（五四五）〇二〇二
発行者／なおえつ信金倶楽部
発行責任者／中川虎三
編集協力／（有）北越出版
責任者　佐藤和夫
内容などの問合せ先
北越出版
〒九四二－〇〇八二
上越市国府三－九－五
E-MAIL hokuetu@seagreen.ocn.ne.jp

季刊 直江の津



発行／平成十五年九月二十日■発行者／なおえつ信金倶楽部■発行所／直江津経済文化研究会■制作協力／(有)北越出版■表紙構成／小谷充

頒布価格／三〇〇円(送料一八〇円)